
老いと病の戦後史

—体験としての医療から—

History of Age and Illness in Post War Japan
— viewed through medical care as experienced

向井承子

私自身と私の家族の体験を通して老いや病を語ってみたい。なぜなら、老いも病も、根本的には「私の老い」「私の病い」、大切な「私の家族たち」の痛みや苦しみ、死の不安などとして「私の暮らし」に登場してきたからである。その痛みや苦しきは時代のなかで、時に放置され、時に死に追い込まれ、時には人や社会の支えによっていのち長らえ、今度は長らえた「いのちの質」を問い直されたりしてきた。医学の分野では、病気の持ち主である病人は患者と呼ばれる。患者とは医学・医療の対象としての呼称でもあるが、行政の仕組みに位置づけられ制度的にも確立された表現である。しかし、医療を考えるには、病気に苦しむ人、つまり「病人」という視点から医療を考える作業が根源的に必要であると思う。

病は時代と社会の環境と思想の下で特有の顔を持つ。私自身と家族の「戦後史」を病気という側面から振り返るだけでも、戦中戦後の混乱と貧困下で蔓延した感染症、科学が人間より優先された時代の葉禍や公害病、医療システムが過剰医療を誘導し、やがて高齢社会に入ると今度は医療システムが過小医療を要請する時代となるなど、時代が産み出す深刻な課題のほとんどを体験した。前近代さながらに技術も社会システムも失われた戦争直後から、当時と比べると異次元なほど発達した医学と患者をとりまく複雑な制度の仕組み（人間への福音のためというよりも人のいのちやくらしと脈絡を欠きながら増殖しきった存在と成り果てた）へと一気呵成に変貌をとげた時間を体験した者としては、一世で三世を生

きた思いもある。その間の体験を、病人の視点からできる限り時間軸にそった記録を試みてきた（拙著『病の戦後史』（1990年）は原点となる）。しかし、素朴に記録を表すだけの方法は、専門家の視点からは「個人的な愚痴」として無視されがちだった。病人のことはばを収集し、社会科学的なアプローチから分析する道は最近まで長く閉ざされてきたのである。

孤独な作業に励ましを得たのは、九〇年代に入りご縁をいただいた二人の専門家の視点だった。医師で『現代日本病人史』など数々の労著を残された川上武先生は、明治期以降の医史学の業績は、医学的知識の歴史、医家の地位の歴史、疾病、とくに国民病の歴史の枠内にとどまり…病人史と主張できる仕事を見つけるのは困難であり、また、戦後は文化に偏し、病人史に近い疾病史も医学・医師からのアプローチに偏りがちだったと分析。「病人史は病人の側に立たざるを得ない」、「個々の疾病というより病人を集団として把握し、それに社会科学的なアプローチをするところに病人史の神髄がある」と指摘、孤独で素朴な作業に「医学と社会」の関連を問う史料としての意味づけをいただいた。

もうひとつ、ウイルス学の先達、川喜田愛郎先生の視点、理念も大きな励ましをいただいた。医学に無縁の私には先生の晩年の大著、『近代医学の史的基盤』は衝撃だった。「私」にとって「病気」とは「私と家族が病むことにつきまとう苦しみ、痛み」だった。苦痛を治し、癒し、いのちが一瞬でも長かれと祈り、そのために人間が創り伝承してきた医術にすがることができる時間生きてきた。だが、医療を求め

る心は時代のなかで踏みにじられてきた。高度の医学を発達させた戦後史は、人と医療の関係（人間と科学の関係もそうだが）を引き裂く方向へのエネルギーを増殖させながら進んできた。ことに八〇年代以降の医療環境は、病人を技術と制度の合体が産み出す理念のない世界に陥れた。そのついでに川喜田先生が晩年に大著を記す動機として紹介されたヒポクラテスの『古い医術について』にある「悩み」、「パターマ」と出会った。「病人とは人の『もろもろの悩み』、『パターマタ』のひとつ…。貧困とか戦禍のような一般的な悩み事ではなく、身体にかかわる、痛み、苦しみ、死の予感、およそそういった『パターマ』とむきあうためにも、メディスンにとっては医師と患者の両眼視が必要」という視点を、病人と医療を結び合う古くて新鮮な課題として改めて受けとめる契機となった。

超高齢化社会の現在、私たちは慢性の病、認知症、障害を抱える人々の増加…など未曾有の現実と直面している。人々の意を受けて運用されるべき民主的

法治国家、日本だが、社会の維持のために限られた社会資源の有効活用を荒々しく模索する現在である。いのちが政治・経済の数值化モデルの対象となる一方で、関連報告書等には「社会の負担となる人々の増加」という文字も散見する。人のいのちのあり方が否応なく財源論の嵐に巻き込まれる時代であればそれだけ、「人と医学、科学」の根本理念を問う作業が大切にされなければ、人と社会は容易に優生思想の集団に墮す危うい存在である。医学を発達させ、いち早く福祉国家を掲げたワイマール共和国がその構成員の意思によって民主的にナチスドイツを生み出した歴史を忘れてはならない。

私たちにとって最大の焦眉の課題は、「いかに分かちあえるか」という叡知を、数字モデルの即答を求めるのではなく深い理念を問う作業によって創り出すことである。

この論文は、平成 21 年 10 月 17 日（土）第 18 回北海道老年期認知症研究会で発表された内容です。